

月報 日本から発信!

4 - 5月の動き

グローバル化と格差・不安の拡大

日本の観光資源を活用せよ

クリーン開発の適正な価値

南インドでのIT研修

グローバル化と格差・不安の拡大

日 本のグローバル化と情報化が進むにつれて、経済的な格差が拡大し、社会不安も増幅しているのではないかと指摘が多くなされるようになった。もはや将来に希望がもてなくなった「負け組」と巨大な富やパワーをもった「勝ち組」が固定化していく「希望格差社会」になったという論者もいる。

実際に最近の専門家の調査では、日本の所得格差は、米国や英国のような競争社会における所得格差とほぼ同じ程度に拡大しており、その他の西欧諸国よりも格差は大きくなっているという驚くべき結果も報告されている。

もちろん格差の拡大は、日本に限らず、例えば中国などではより鮮明に現れているように、グローバル化した市場経済における不可避的な傾向といえるかもしれない。もしそれを抑えるような規制を行なえば、組織全体や社会全体がグローバル化の中で競争力を失い、存続そ

のものが危くなるであろう。規制緩和や構造改革や競争市場化が必要な所以である。

しかしそうだからといって今のような格差拡大の傾向を放置すれば、日本では犯罪や自殺といった社会病理現象が目立つようになり、また中国では今回の反日デモや暴力に見られるような社会的不満が色々な形で噴出して、決して健全な社会は育たない。

このような問題に関して、グローバル化のなかで働くことの喜びや不安、および市場や制度のあり方を議論するセミナーが、4月27日にGLOCOMで開催された。スピーカーは「日本的な経営」の意義と「働くこと」の意味を半世紀にわたって問い続けてきたロナルド・ドーア教授で、多くのセミナー参加者との活発な意見交換が行なわれた。議論の主要な論点については、ドーア教授の近著『働くということ』を参照のこと。 - 宮尾情報発信機構長



講演するドーア教授

目次

4-5月の動き	1
グローバル化と格差・不安の拡大	1
「会社は誰のものか？」ラジオでも	1
日本の観光資源を活用せよ	2
クリーン開発の適正な価値	2
南インドでのIT研修	3

「会社は誰のものか？」ラジオでも

毎月一回英語と日本語で放送されているラジオ NIKKEI の番組「宮尾尊弘の情報発信研究所」も、4月3日で第18回を迎えた。今回、バーチャル論壇のコーナーで取り上げられた論文は、企業のオーナーシップ、ガバナンスやM & Aについて書かれた若杉敬明東京経済大学教授の「企業統治：株主価値の追求が肝要」。また、トレン

ド・リサーチのインタビューでは、NCR会長の本田敬吉氏と日本経済の今後の行き先や米国・中国経済などについての熱いディスカッションがたたかわされた。これらは、以下の情報発信のウェブサイトから聴取出来る。

http://www.glocom.org/special_topics/activity_rep/20050425_miyao_radio18/

日本の観光資源を活用せよ

牛尾治朗 (ウシオ電機会長、経済財政諮問会議民間議員)

日 本人は海外旅行に大挙して出かけているが、海外から日本への旅行者は少ない。これからの日本の観光産業に必要なものは何か。

第一に、地域主導で国際競争力のある面的な観光地づくりをすること。地域のやる気によって観光コンテンツを充実させることが大事である。

第二は、観光のソフトインフラを整備すること。レベルの高い専門家や実務家を育成する教育機関と学問体系の整備が大切である。

第三に、外国人の入国手続迅速化、ビザ取得の負担軽減。特に近隣の中国・台湾・韓国からの訪日を容易にすることが有効である。

現在、日本政府は官民連携で「ビジット・ジャパン・キャンペーン」を展開しているが、更に、より戦略的なPRを行うとともに、国民一人一人が大使のような自覚を持つことが大切である。

人々は「住んでよし、訪れてよし」の所に集まる。パ

リは特別な観光施設はないが、人気のある観光都市の一つである。

日本の観光地でも、例えば九州の湯布院は、周辺によい飲食店や土産屋があるので、それを回ったりするだけで二泊はしてしまう。京都でも、金閣寺でのバイオリン・コンサートや比叡山の延暦寺での歌舞伎などのイベントに多くの観光客が集まっている。トヨタ自動車には毎日多くの観光客が詣でており、これには愛知万博を関連させることも考えられよう。

いずれにしても、観光客を引きつけるために地域特有のコンセプトやコンテンツを作り出す上で、地域のイニシアティブが必要不可欠であり、政府はそのような意識を持った地域を支援すべきである。

(文責: 編集人)

英語の原文:
"How to Utilize Japan's Resources for Tourism"
http://www.glocom.org/opinions/essays/20050411_ushio_how/



廃れない観光地

クリーン開発の適正な価値

佐和隆光 (京都大学教授)

京 都議定書が発効したが、米国は、議定書には「致命的な欠陥」があるとして参加していない。日本としては、今後中国・インドにも加盟を呼びかけると伝えられているが、それには、米国が指摘した「欠陥」についての議論を基に、議定書の弱点を補強する政策提言を行って行く必要がある。

ロシアは、温暖化ガスの排出権を他の国々に売るという目論見で結局議定書に参加したが、最後まで逡巡したのも、売却による収入の目処が中々立たなかったことによる。実際、米国が参加を見送ったことにより、排出権の予想価格は急落している。このためもあって、想定されたような広い排

出権市場は成立せず、相対取引に留まると指摘されている。

日本は、国内の節減だけでは目標達成は困難であり、議定書に盛り込まれた「クリーン開発メカニズム(CDM)」を利用し、途上国でのクリーン開発によって、排出権枠を補って行かねばならない。しかし排出権の価値を見積もることが困難であるため、民間企業にはリスクが大き過ぎる。CDMを有効に機能させるためには、政府による排出権枠買い上げの仕組みが必要である。

(文責: 編集人)

英語の原文: "The Price of a Clean Project"
http://www.glocom.org/opinions/essays/20050404_sawa_price/



温暖化ガス対策は？

南インドでのIT研修

NEC 公共システム事業部 樋渡良継

今年の2月から3月にかけて、南インド、ケララ州の州都トリバンダムで、IT (Information Technology) 研修を行った。総勢30名の、システム設計から動作までのソフトウェア開発プロセスを集中的に実践するトレーニングコースだ。

インド南端にあり、アラビア海を臨むこの州を知っている日本人は少ないであろう。また、IT産業の知名度は、隣のカルナータカ州のバンガロールのほうが高い。



しかしケララ州のIT産業への関心は高く、インドで最も早くITテクノパークを開設した。ケララ州のITは観光産業等と並んで主要産業のひとつとなっている。この州は世界的な医療機関を持ち識字率の高さでも知られ、質の高い技術者を育成する環境を持っている。

シンガポール経由でトリバンダムに到着後、州のチーフミニスター Oommen Chandy氏ご出席のオープニングセレモニーが開催され、その日のうちに密度の濃い研修がスタートした。講習と演習を3週、そして4週目に業務システムを開発するワークショップを行った。講習は全て英語、研修生は英語の聞き取り、そして英語での発表に悩むことになった。休日はハードな研修から開放され、近郊への小旅行やショッピングを楽しんだが、後半のハードな研修はその開放感も押し込めてしまうほどの内容であった。(研修内容は”IT Training in South India”で紹介予定)



研修中の食事は全てケララ料理。ホテルのレストランは外国人客の為に辛さを調整しているとのことだが、青唐辛子を使った魚のカレーは食事が終わるまで辛さが残る。ビーフ、チキン、マトンそしてブロッコリーなど食材も豊富で、香辛料も複数使用していて奥深い味わいだ。朝、昼、夜と続けても飽きず1ヶ月の研修生活を支えてくれた。

“神の国”¹¹ は西はアラビア海に面し、東にガーツ山脈そして44の川を持つ美しい観光の地でもある。熱帯性気候

の、夏・モンスーン・冬が季節で一年を通して一定の気温だ。モンスーンの雨とその後のベンガルからの雨により胡椒がよく実るといふ。滞在した2・3月は夏。私達は休日、欧米人に人気のコバラムビーチの散策、8本の川が集まるコーラムのバックウォータークルーズを体験した。

コバラムビーチはゆるい湾状の地勢で津波の影響もみえず観光客でにぎわっていた。潮の流れが速いようで監視員が時折注意の笛をふく。浜辺の店やホテルはやしの葉で葺いた屋根で、ココナツの林と合って落ち着いた雰囲気を出している。



バックウォータークルーズでは3艘のハウスボートに乗り込み、往復6時間、穏やかな水面を進み、小さな支流へ入っていく。岸辺はココナツの林とその下に大小の家々が見え隠れする。子供たちはいたる所でボート上の客に手を振る。船の中では日本での生活が長いトーマスさん¹²が岸辺の木、鳥、漁具などについて説明してくれる。日本語での説明はわかりやすい。

神の国は先進技術や観光の他に、古典文化についても魅力あふれる国だ。生活に音楽は必須のようで、お祭りには大音響の歌が流れ、パーティーでは演奏者を招いての懇談となる。ホテルで演奏を聞く機会があった。竹製の横笛、太鼓、シターとバイオリンの編成で、皆座って演奏する。そのほか舞踏など古典の文化をインドの人たちはとても大事にする。3000年前の舞踏を昔のままの形で継承するクーディヤタムがスリスールの町にあるとトーマスさんが教えてくれた。



インドと日本は、言葉の壁を越えてもっと多くのことを知り、お互いの経済や文化を理解しあうことが今必要だと強く感じた。

¹¹ケララ州は”Gods Own Country”と呼ばれる

¹²研修中お世話になったEFSON INTERNATIONAL社長

Global Communications Platform from Japan



月報・日本から発信！

月1回月末発行
発行人・宮尾尊弘
編集人・浦部仁志

国際大学グローバル・コミュニケーション・センター
106-0032 東京都港区六本木 6-15-21 ハークス六本木ビル2F
TEL: 03-5411-6714 / FAX: 03-5412-7111

ウェブサイトにもぜひ
<http://www.glocom.org>

今年の東京近辺の桜は、直前の寒気によって開花こそ遅れ気味でしたが、一旦開いてからは数日で満開、そして直ぐ冷たい雨に晒される、という、大変慌ただしい展開となりました。

国中が桜の話題で沸く、というのはとても平和で健全な姿ではないでしょうか。もっとも、海外での報道の中には、日本人が桜を好むのは意識の底にある軍国主義的心情を呼び覚ますからだ、とかいう、的外れの記事も...最近はかなり減ったようではありますが...相変わらずあるようです。

しかし翻ってみれば、そのような記事が出回ること自体、まだまだ日本が誤解されているということの証左であり、事実、最近の日中(韓)間の確執を報道する、当事国以外のメディアでも、これほどではなくても我々の認識とかなり異なる前提に基づく記事が目につきます。

情報発信機構が掲げる目的の重要性が、改めて認識される毎日です。

後記

北京でのデモの暴徒化に始まり世界の耳目を集めることになった日中間の確執(というより、中国の反日感情)は、これまでに無い規模で世界のメディアで報道され、また数多のコメントが発表された。

今回の各種報道が従来と異なる点は、まずその膨大な量であろう。これが、ある程度の自動的な相互作用を生み、多くのコメントが、恰も関連をもった議論のように展開した。更に、暴動発生から日中首脳会談を経てデモが本格的に抑圧されるまで数週間を要したため、人々に吟味と思考の時間を与えることとなり、論点

が深化していったという側面もある。

これにより、当初「戦争犯罪を謝罪せず今また軍国化しつつある日本が、戦争被害者である中国の平和的な人民の心をまた傷付けた」という従来通りの報道パターンが、「大国振っては居るが実は脆弱な中国(政府)」へと大きく流れを変えることに繋がったのは、一部で指摘されている通りであろう。

この間の報道や識者コメントについては、情報発信サイトの、特に「Debate」欄或いは「Japan in the News」欄を中心にフォローしているので、是非ご覧頂きたい。

GLOCOM情報発信機構

経営委員会

青木 昌彦
猪口 孝
牛尾 治朗
行天 豊雄
小林 陽太郎

顧問

中山 素平

運営委員会

宮尾 尊弘
佐治 俊彦
中馬 清福
勝又 美智雄